

読書の秋に

先々週に滋賀県学校図書館研究大会が本校で開催され、読書について考えることが増えました。時々、この通信でも読書の素晴らしさと重要性について書いてきましたが、今回もそのことを伝えたいと思います。閉会式で、「一冊の本が人生を変えることもある」と言いました。教職に就いたときに、尊敬する先生から「教員の仕事は勉強だ。教えることではない。自分自身が学び続けることだ。とにかく本を読め。何でもいいから月に1万円は本につき込め」と助言されました。私は、数年間まずは毎月1万円分の教育や部活指導に役立つ本を買うところからスタートし、その本を並べておいて、時間を作り読んだものでした。教育雑誌も今よりたくさん出されている時代で、毎月4～5冊読んでいました。月1万円ペースで教育書を読み、日々実践していく中、学校は荒れていましたが、今から思えば理論と実践が往還できた時期となりました。ただ、野球部の指導は強いチームを作っても勝ち切ることができませんでした。そんな中、読書の転機は教員生活6年目にやってきました。

現在、長浜市教育委員会教育長をされている織田恭淳氏から「河地は野球のことばかり勉強しているから勝てないのだ。野球以外の勉強をしろ」と、広岡達朗（プロ野球監督）の「勝者の方程式」と米長邦男（棋士）の「運を育てる」と立花隆（ジャーナリスト）の「宇宙からの帰還」の3冊をいただきました。棋士の本も宇宙の本も読むのは初めてでしたが、30代では意識的に「教育書は読まない、異分野の方から学ぼう」と読書の姿勢が変わり、読書の幅が広がりました。雑誌「致知」を定期購読し始めたのも30代でした。これが分岐点になりました。

私は本と出会い、その作家が気に入ると、その作家の作品を全部読みたいくなります。そして、その人の人生のテーマを考えます。これまで作品のすべてを読んだのは、将棋では米長邦男、羽生善治、囲碁では藤沢秀幸、野球では野村克也、遺伝子学者の村上和雄、宗教学者の山折一雄、数学家の藤原正彦、教育では東井義雄、森信三、藤原正博です。小説では山崎豊子、東野圭吾、池井戸潤、百田直樹、島本理央は全部読みました。司馬遼太郎は、「街道が行く」シリーズをあと数冊残すだけとなりました。また、青山美智子も近年マイリストに入りお気に入り作家となりました。校長通信第1号で「縁尋機妙・多逢聖因」という言葉を紹介しました。人と人との縁は実に不思議なもので、よい縁がさらにより縁を尋ねて発展していく様は誠に妙なものという意味ですが、人と人との出会いだけでなく、本との出会いが、次の本との出会いにつながったり、本が新たな人と出会わせてくれたりする経験もしてきました。

ちなみに20代の時期に一番読んだ教育書は坂本光男の集団作りシリーズでした。今の時代でも通用する実践であり、今の若い先生に・・・と感じるあたり私も年も取りました。どうぞ気が向くままに良書にふれる秋にしてください。 (2023.10.23)